

二人の弟子

池をめぐらした本堂の奥から修行僧たちの読経が聞こえてくる。西山寺の深い木々の緑が白いもやの中からゆっくりと現れる。山門に立って深呼吸し、杉木立に囲まれた薄暗い参道に目をやった智行は、急な石段をゆっくり登ってくる一人の男がいるのを見付けた。ぼろの着物をまとい、髪を伸ばして痩せこけた男の姿に、一瞬、眉をひそめ、声を掛けようと歩み出して智行ははっと息をのんだ。

「道信、道信なのか。」

5

智行は土地の名家の三男に生まれた。幼いときから才覚を発揮しこの寺の上人に師事していた。道信は智行と同年輩で、先の戦で孤児となり、上人が引き取って育てたのだった。若い二人の学問への深い情熱を愛した上人は、十四歳になった二人を都の本山へ送り出してくれた。

都での修行と学問の日々は今となつては懐かしいものだが、少年たちにはつらいものだった。智行は自分を励まして学問に没頭し、また厳しい修行にも必死の思いでついていった。

そんなある夜のこと、道信に呼び出された智行が聞いた話は思いもかけぬものだった。

「私はある女性のことが忘れられなくなつてしまった。こうして勉強していることが、その女性と会っていると全て無意味なように思われるのだ。」

15

その女性とは都で評判の白拍子で、学問一辺倒の智行ですら幾度かその名を聞いたことがあった。しかし、共に厳しい修行に励まし合つてきた同志だと思つてきた智行にとって、道信のこの言葉はにわかには信じられるものではなかった。元々道信は情熱的で一途だが少し突っ走るところがある。

思い詰めて周りが見えなくなっているのだろう。止めてやらねばならない。智行の言葉は厳しくなった。

「それは一時の気の迷いだ。白拍子だつて本気で相手にするものか。お前は目の前の修行のつらさから逃げようとしているだけだ。目を覚ませ、道信。」

5

そのままうつむき、うなだれていた道信、肩を落として何かにじつと耐えているような道信の姿を智行は昨日のことのように思い出すことができる。智行は道信が分かつてくれたものと思つていた。二人で励まし合いながら続けてきた学問の道の大切さを道信もよく分かっているはずだった。

ところが数か月後、道信は本山を出奔してしまったのである。それ以来、道信の行方は全く分からなかった。智行は道信の行為が、二人で励まし合つた日々への裏切りのように思つたものだ。だが、いざれ道信には厳しい修行の道は合わなかったのだ。それだけの男だったのだと思い、自らの修行に熱中する中で、道信のことは記憶から薄れていった。こうして智行は都での修行を終え、知識を身に付け、立派な僧侶に成長して故郷の西山寺に帰つていった。

10

「あの白拍子にはすぐに捨てられてしまったよ。」

道信の言葉に、智行は古い思い出から呼び戻された。

15

「そんなことだろうと思つたよ。」

「その後はひどいもんだ。遊び暮らしが身に付いてしまつていたし、金はないし。随分ひどいこともやつたよ。盗人みたいなこともやつてしまつたし……」

少しの間、道信は遠くを見るようにしていた。そしてゆっくりと言葉を継いだ。

「それでも何とか生きられるものだ。人並みに女房を迎えて所帯ももつたんだ。」

だがその女も二年後に病で亡くなつてしまつたということだった。かわいそうなことをしてしまつ

20

た、と道信は、ぽつりとつぶやいた。

「一体お前、ここへ何しに。いや、何だって今頃、寺を訪ねる気になったのだ。」

智行は自分の声が非難がましいものになっているのに気付き、言葉を改めて聞いた。

「俺は死のうとしたことがあるんだ。」

道信は淡々と語った。まともな暮らしをしようとした矢先に妻を亡くしたことは道信にとって深い哀しみであつたのだろう。再び酒浸りになり、そして今度はもう生きる意欲すら無くしてしまつていったのだ。捨て鉢な気持ちのまま、まだ雪残る北山へ向かつたのだと道信は語った。歩き疲れ、雪に足をとられた。そのまま眠るようになって死ねたらという思いが頭をかすめたという。

「でもそのとき見付けたんだよ。」

道信の聲が急に華やいだ。

「雪の中に倒れてこのまま眠れると思った。ゆっくりと雪が溶けていく頃にはもう冷たいとかいう感覚もなかったな。そのときさ。雪が溶けた地面の中に何か丸い茶色い物が出ていたのさ。小指の先ぐらいのがいくつも。妙に気になって周りの土をどけてみたんだ。そうしたら、見付けたんだよ。」

「何を。」

「フキノトウさ。まだ雪が覆っているのに。掘ってみるともう鮮やかな薄緑色なんだよ。」

道信の顔はとても幸せそうに輝いている。智行は子供のように興奮して頬を紅潮させている道信の心をはかりかねていた。

「寺を出奔しても、盗みをやっても、女房につらく当たっても、悪いとは思わなかった。どうせ俺はこの程度の人間さ、つてね。後悔もしなかったよ。でもあのフキノトウを見たとき……」

道信は不意に言葉を詰まらせた。そして智行の目を真つすぐに見つめて言った。

「智行、私はもう一度修行をやり直したいんだ。」

20

「じゃあお前、この寺に戻りたいと言うのか。」

「上人様のお許しがいただけるなら。いや、許していただけるまで何度でもお願いするつもりだ。」

そんな勝手に許されるはずがない、と言おうとして智行は口をつぐんだ。自分が差し出がましく言うまでもあるまい。上人様は道信が期待を裏切つて出奔したことに深く心を痛めていらつしやつた。今更戻りたいなどと言ってもお許しになるはずがない。

5

道信には、上人様にお話してみる、とだけ言って、智行は本堂の上人の元に向かい、道信の帰郷を伝えた。

10

意外にも上人は道信にすぐ会おうとおつしやつた。

上人には十年ぶりの再会である。もう一度この寺で修行を、と懇願するその男は、上人が愛したあの頬を上気させ目をきらきら輝かせていた少年ではない。修行を捨て、すさんだ暮らしに手を汚し、進退極まって寺を頼つてきた貧しい男だ。

15

じつと黙って遠く道信を見つめる上人の深いしわの刻まれた険しい横顔を見ながら、やはり上人様のお怒りは解けないのだ、と智行は確信した。と、そのとき、上人は深くうなずいて言った。

「お前は本当にたくさんのかんことを学んできたのだな。もう一度この寺で修行したいというのなら、ここで暮らせばよい。お前は今までもこれからもずっと私の大切な弟子なのだから。」

上人は道信の手を取った。その手は道信によってしっかりと握り返されていた。

20



思わぬ展開に驚き、智行はそつとその場を離れた。仏の道を一旦捨て、罪を犯した男が一体何のために戻って来たのか。上人様はなぜ、そんな男を再び弟子におとりになるというのか。智行にはどうしても分からなかった。そしてその分からなさは、智行の中で次第に怒りに変わっていった。

智行はその夜、意を決して上人の部屋を訪ね、こらえかねた思いを吐き出した。

「上人様、道信は修行を途中で放り出して逃げ出した人間です。そのような男をどうして再び弟子におとりになるのですか。あの男にはもう学問をする資格はありません。」

上人が何も答えないので、智行の声は更に力が入り上擦っていく。

「他の弟子たちは皆厳しい教えを守り、修行に耐えて勉強しています。そのつらさに耐え切れずに逃げた道信を許してよいのですか。脱落した者には厳しい態度で臨むべきではないのですか。」

智行の激しい言葉を上人は黙って聞いていた。やがて智行に優しいまなざしを向けてつぶやいた。

「智行よ、人は皆、自分自身と向き合って生きていかねばならないのだ。」

それきり黙して語らぬ上人に、智行はいたたまれず一礼して部屋を退いた。

上人の言葉の意味をはかりかね、僧房に戻る気にもなれず、智行はふらふらと草の茂った庭の小道へ歩き出した。

夜の月に照らされて、池の水がきらきらと光っている。月は、暗い夜の闇の中から池のほとりに咲く一輪の白ゆりをくつきりと照らしていた。その純白の輝きに智行の暗い心は圧倒された。知らずにあふれてくる涙を止めることができないまま、智行は月の光の中にいつまでも立ち尽くしていた。

